川のある街

表題は「伊勢湾台風物語」という副題がついた清水義範さんの小説だ。伊勢湾台風から半世紀後 2009 年 6 月から 10 月まで中日新聞朝刊に連載され、11 月に中日新聞社から刊行された。

「あとがき」から―この小説の主人公は名古屋という街そのものである。伊勢湾台風という未曾有の大災害に対して、名古屋の人々はどう対処したのか、どう助けあったのか、どう立ち直ったのかを書いたつもりだ。自分の、あの台風の時の被災体験をもとにして、あの時代が色鮮やかによみがえってくる小説にしようとしたら、とてもラクにすらすらと書けた。

小説は「平成 21 年 9 月 26 日」に堀川を眺めるところから始まる。そして「昭和 34 年 9 月 22 日」へと遡る。伊勢湾台風の 4 日前だ。名古屋駅にも近い那古野地区にある小学校の社会科授業が最初の舞台だ。丹羽正太という 4 年生とその家族、友だちと先生、円頓寺と思われる商店街の人たち中心に、伊勢湾台風前後の様子が作者らしいタッチで描かれる。

じつは、この小説を読んだのは最近だ。伊勢湾台風については、何回かレポートしてきた。清水義範さんと同世代であり、私も伊勢湾台風を小学生の頃に名古屋市千種区で体験した。丹羽正太という小学生と同じような体験をしたので、「親近感」を感じながら読み進んだ。

それは昭和 34 年(1959)9 月 26 日夜のことだ。その日が土曜日ということも、今でもしっかり覚えている。昼頃に学校から帰り、風がだんだん強くなり、なんだか落ち着かなかった。早めの夕飯を食べると、まもなく停電した。小説のように雨戸とガラス窓がしなり、母と兄と必死で押さえていた。近所の人も助けに来てくれたと思う。千種本町の木造 2 階建て長屋、「鉄道官舎」2 階角がわが家だ。東の方からの風が南に変わり、なんとか窓を飛ばされずにすんだ。停電で暗闇のなか、はっきり記憶にないが、数時間は窓を押さえていたと思う。

翌朝は晴天であった。屋根の瓦が飛び、大きな木も倒れているのを見て、風の強さに驚いたものだ。南区内田橋と中川区中島の親戚は、床上まで水に浸かった。翌日あたり、母が内田橋に腰まで水に浸かってお見舞いに行った。小説には南区道徳の話も出てくる。最近、この道徳にも何回か出かけた。これについては先にレポートした。

（2016 年 9 月 26 日）